

覇者の戦塵1945

戦略爆撃阻止

谷 甲州

Koshu Tani

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

装画 佐藤道明

地図 らいとすたつふ

覇者の戦塵 1945

戦略爆撃阻止

目次

序章 市ヶ谷台への道

10

第一章 暗闘

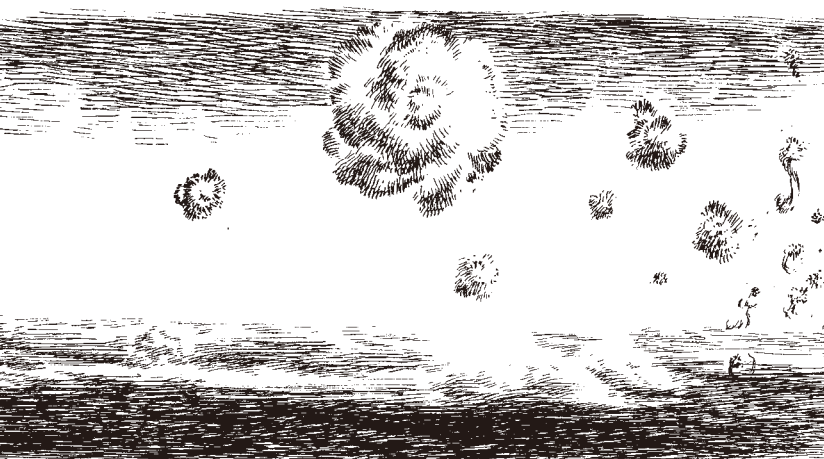
20

第二章 空襲

48

第三章 極東戦略

79



第四章 鹿島灘航空戦

第五章 伊豆房総沖夜戦

終章 次の一戦

あとがき

207

198

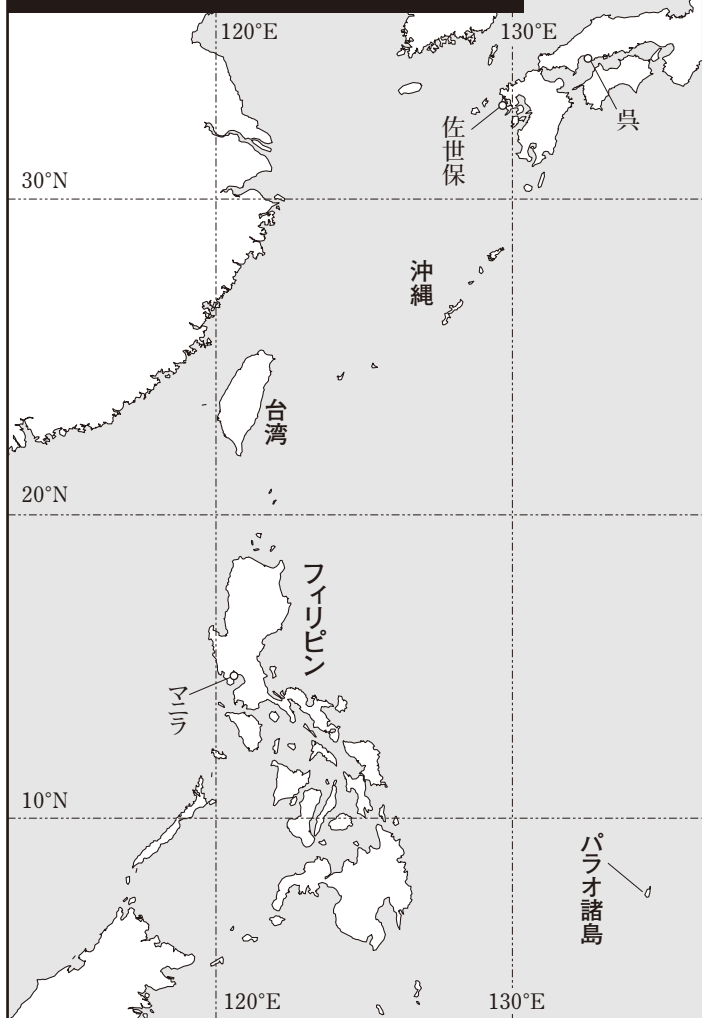
157

117

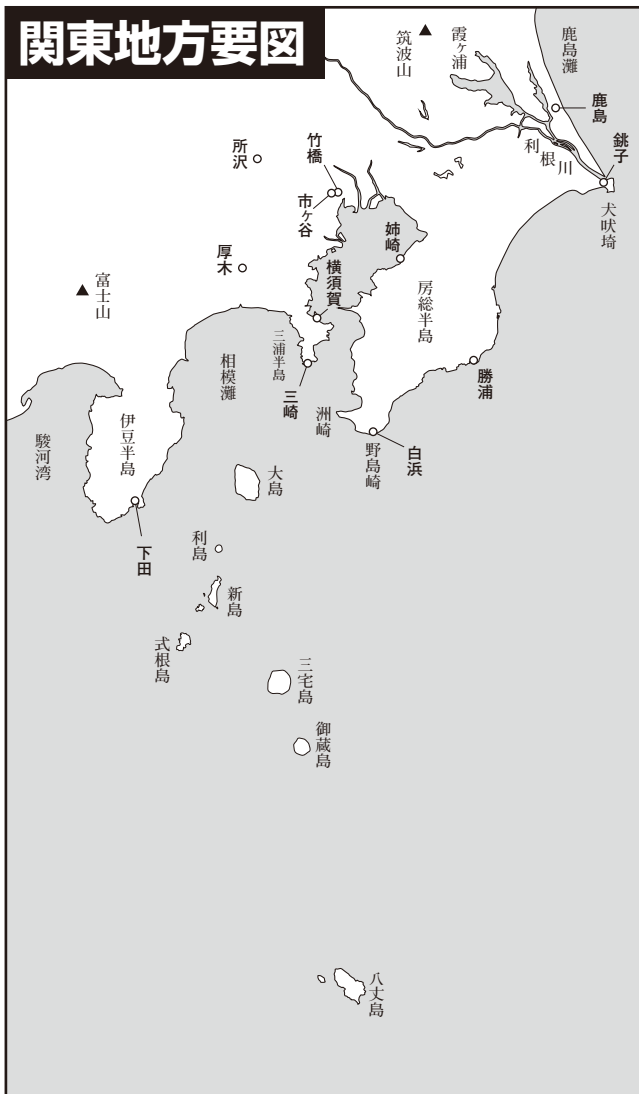




北西部太平洋要図



関東地方要図



覇者の戦塵 1945

戦略爆撃阻止

序章 市ヶ谷台への道

海軍航空隊の厚木基地には、予定より遅れて到着するらしい。

はちじょうじま

八丈島で海軍航空隊の連絡機に便乗した秋津大佐にとつては、今回の出張ではじめて経験する齟齬そごだった。だが昨日からの出来事にくらべると、さして問題にするほどではなかった。航空燃料には余裕がありそうだから、燃料切れで遭難する恐れもない。

最悪の場合は予定をくりあげて帰任することも考えていただけに、拍子抜けするほど順調だったといえる。事前の計画にしたがって、日本軍の防衛拠点を次々と視察してきた。予想外の出来事もあったが、なんとか無事に日程を終えられそうな目処がついた。

だがそれも、八丈島までだった。日程の最終段階になって、齟齬がつづいたのだ。最初は陸軍の傭船だった。八丈島ですべての日程

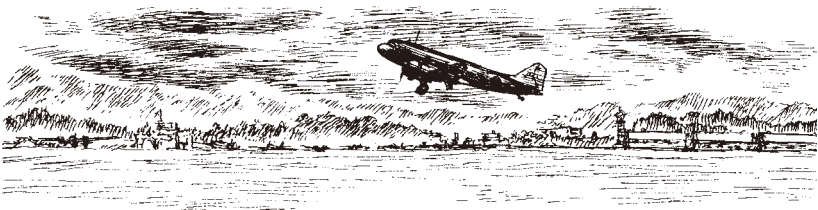


を終えたあと、内地にむかう徴用船を利用して帰任するつもりだった。ところが予定がすぎても、船は港に到着しなかった。

事情はわからない。戦時のことだから、敵潜の雷撃を受けて沈んだ可能性もあった。さもないければ急に予定が変更されて、秋津大佐の存在は無視されたのかもしれない。便乗者がいることは通告しておいたが、秋津大佐の所属先や階級までは明かしていなかった。

秋津大佐の勤務する参謀本部の作戦課は、実質的に帝国陸軍を主導する頭脳集団といえた。その中心人物である秋津大佐の動向は、軍事機密なみの秘匿事項としてあつかわれていた。秋津大佐が北中部太平洋地域を視察していたことは、米軍に知られてはならない。

視察の事実から、日本軍の情勢判断を読み解けるからだ。少なくとも視察が終了するまでは、日本陸軍が積極的な動きをみせることはない。そう公言しているようなものだ。あるいは日本軍は北中部太平洋に、米軍による次の進攻があるとして防備に力を入れている。だから正体を隠して出張したのだが、それが裏目に出たようだ。無論一日や二日の遅れなら、それほど問題にはならない。予定どお



りに日程を消化できるとは限らないし、予想外の事故が起きる可能性は常についてまわる。

だが帰任があまり遅れると、不測の事態が発生する可能性があった。内地を離れていた一カ月間は、たえずそのことが気になっていた。杞憂であることは、承知している。冷静に考えれば、一カ月程度の間に現在の内閣が倒されることはなさそうだ。

そう判断して、長期の出張に踏みきったのだ。その決断は間違っていないなかったし、結果的に最善の選択をしたと考えられる。非常にきわどい綱渡りのような一カ月だったが、現在までのところ予想が外れたという情報は入っていなかった。

しかし秋津大佐の不在時をねらって、現政権に対する圧力が一気に高まる可能性は否定できない。最悪の場合、秋津大佐がひそかに進めてきた和平工作はすべて無効になる。現在の内閣に終戦工作を実施する力はなく、それが可能な次期政権までの繋ぎと考えていた。

それほど現政権の支持基盤は脆弱で、風向きが変化すれば総辞職に追いこまれかねない。しかも後継首班として、東條陸軍大將が



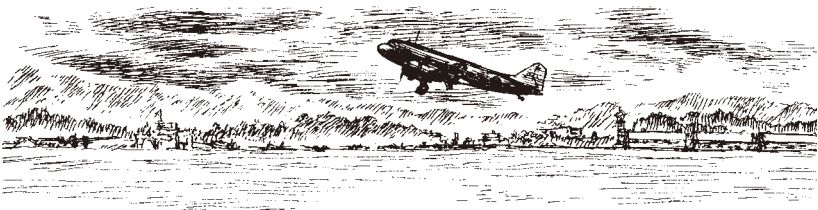
息を吹き返す可能性もあった。たとえ他の人物に大命が降下しても、東條前首相の傀儡^{かいらい}となるのではないか。

そんなことになれば、参謀本部の人事刷新までが呆気なく崩壊する。秋津大佐らによって参謀本部から放逐され、昨年の秋の時点で任をとかれた旧勢力が復活する可能性もある。長年にわたって参謀本部の作戦課に居座っていた各務^{かがみ}大佐も、例外ではなかった。

出張前の時点では待命となっていたが、いまごろは予備役に編入されているはずだ。参謀本部の作戦課を追われれば、ただの横暴な元軍人でしかない。その各務大佐までが、参謀本部に復帰するかもしれないのだ。わずかな隙も、みせてはならなかった。

それなら情勢が安定するまで、前線の視察を先送りにするべきではないのか——そのような意見を、口にするものもいた。しかし秋津大佐は、耳を貸そうとしなかった。先のばしにしたところで、状況が好転するとは思えない。

むしろ時間がすぎるほど、東京を離れにくくなるのではないか。それ以上に、前線の実情把握は重要だった。連合軍の動向や自軍の



士氣を理解しておかなければ、和平工作など思いもよらない——そんな信念があつたものだから、何をいわれても動じなかった。

秋津大佐を拘束しても計画を中止させると息巻いていた者もいたが、最後には大佐の主張を受け入れた。強硬に反対していたのは、大佐に近い人物が多かつたせいだ。結局は秋津大佐に対する信頼が、同意をとりつける格好になった。

そのような事情があるものだから、八丈島で足踏みをしているわけにはいかない。

気は焦るのだが、帰任当日になつても徴用船は到着しなかつた。不確かな情報を入手したのは、その日の午後だった。徴用船は機関故障が発生して、母港に引き返したというのだ。真偽は確かめようがないとはいへ、待ちつづけても意味はなさそうだ。

決断するしかなかった。別の手を打つしかないと考えて、海軍基地に足を運んだ。厚木の海軍航空隊基地から、頻繁に連絡機が往復していることは知っていた。厚木基地に常駐する部隊から、分派された夜間戦闘機隊もあつた。

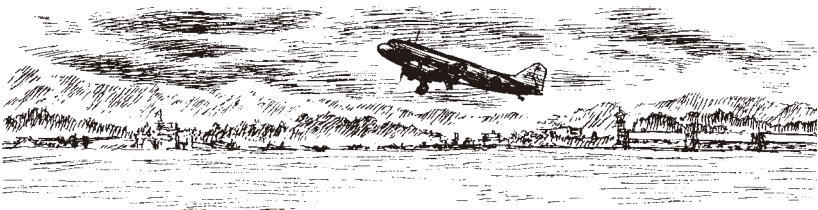


こんな事態になるとわかっていたら、最初から海軍航空隊を頼るべきだった。当初の予定にこだわったせいで、丸一日かく無駄にしました。その点が悔やまれたが、遅れを取りもどすことはできる。ただし陸軍から、正式な申し入れをしている余裕はない。

海軍部隊の司令部付きとして常駐する陸軍参謀を、巻きこむ気もなかった。陸軍の参謀が関与するのであれば、東京の参謀本部に書類を提出しなければならない。とてもではないが、そんな余裕はなかった。現地部隊との口約束で、片づけられる問題ではないのだ。

航空機による洋上飛行は、常に死と隣りあわせだった。機器のわずかな不具合でも事故死することがあるし、敵襲を受けて戦死する可能性もある。もしも秋津大佐が機上で戦死したら、責任問題に発展しかねなかった。

それを避けるには、連絡機の機長と直談判するかなさそうだ。あとは厚木に到着するまで、機内に閉じこもってしまえばいい。まるで夜盗か空き巣ねらいだが、成算はあった。ことさら大義を口にする気はない。帰任を遅らせたくない事情を、理解させればいいの



だ。

いずれにしても、事前の準備は欠かせなかった。連絡機の発進地や飛行計画は無理にしても、八丈島に到着する時刻や飛行場は確認しておくべきだ。八丈島には建設途上のものをふくめて、全部で四カ所の飛行場がある。

実際に運用されているのは三カ所だけで、海軍航空隊の基地施設は島の中央部に近い第二飛行場にあった。第一飛行場は規格が古く、地形の制約もあるため低速の旧式機のみが運用できた。新たに建設された第三飛行場は、単発機の離着陸専用とされている。

実質的に第一飛行場は、非常用として使われていた。二カ所の飛行場が爆撃で損傷した場合や、定期的な補修工事の時でも最低限の機能を維持するためだ。さらに二カ所の飛行場は誘導路がつながっているから、掩体や駐機場は共用できた。

第二飛行場の混雑時には、誘導路を伝って第一飛行場の施設を利用していたらしい。したがって長期にわたる整備が必要な機材は、第二飛行場ではなく第一飛行場に移動して作業に着手していたよう



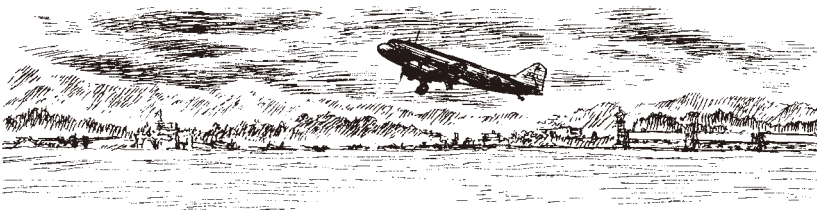
だ。

そういった状況からすると、連絡機が着陸するのは第二飛行場以外に考えられない。というより連絡機が双発の輸送機なら、他に着陸できる場所はなかった。無理をすれば他の飛行場でも可能だが、大量の燃料や積荷を搭載して離陸するのは危険きわまりない。

やはり着陸するのは、第二飛行場かと見当をつけた。ところが着陸後に停止する場所が、わからない。常識的には滑走路に隣接する駐機場と考えられるが、なんとなく違和感があった。敷地の外から駐機場をみても、連絡機が飛来しそうな様子がないのだ。

燃料補給の準備はもとより、整備員や操縦の交代要員らしき姿も見当たらない。もしかすると、飛行場が違っているのかもしれない。秋津大佐は困惑した。飛行場は広大で、徒歩で移動することなど思いもよらない。

第二飛行場に着陸したとしても、基地施設から遠く離れた位置に駐機する可能性もあった。気になる状況だが、不用意に動くことはできない。間近の駐機場で停止して、給油や整備をおこなう可能性



は残っている。

腰をすえて状況を確認するしかないと思ひなおした。落ちつきなく動いていたら、軍事密偵と間違われるかもしれない。そう心に決めて、機影があらわれるのを待った。その矢先に声をかけられた。参謀本部の秋津大佐ではないかと、声の主は問いただした。

ゆつくりと、秋津大佐はふり返った。いつの間に近づいたのか、搭乗員らしき人物が背後に立っていた。海軍の飛行服を着こんでいるが、面識はなかった。現役の搭乗員にしては歳をとりすぎている気がした。何ものかと思っていたら、相手が先に名乗った。

海軍第三〇二航空隊司令、小園安名大佐だと。
こぞのやすな

その名には記憶があつた。たしか本務は他にあつたはずだが、あえて厚木の航空隊司令を名乗ったのは何か理由があるのかもしれない。そう思っていたら、いきなり小園大佐は本題に入つた。秋津大佐にとっては、耳寄りな話だつた。

陸軍の徴用船が来ないので、困っている様子だがどうか。

厚木まででよければ、連絡便に同乗することも可だがどうするか。



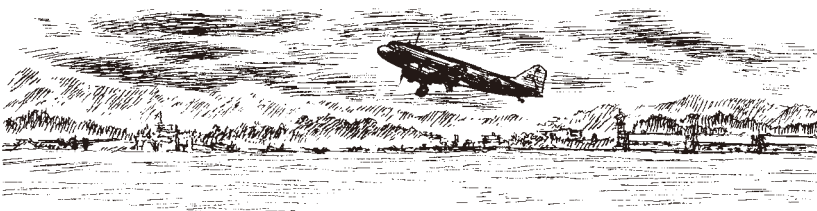
連絡便といつても、鹵獲した重要物資を内地に輸送するだけだ。便乗者を受け入れる余裕はある。燃料の備蓄量も八丈島には充分あるから、満載状態まで積みこむことも可能だ。

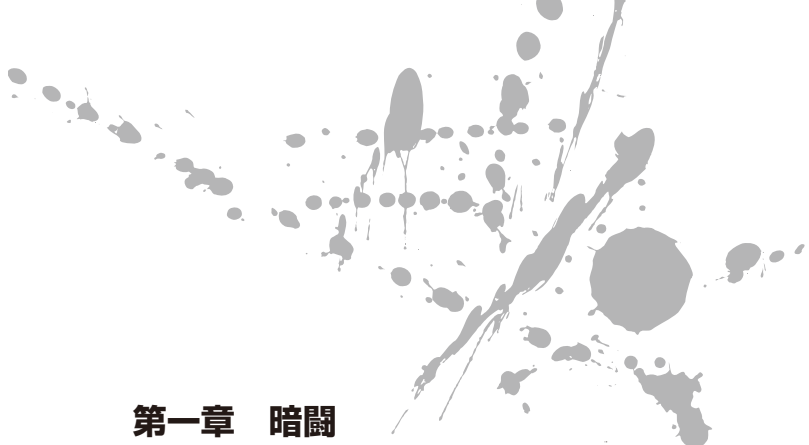
秋津大佐は耳を疑った。驚きすぎて、すぐには信じられなかった。それが本当なら渡りに舟だが、うますぎる話は警戒するべきだった。小園大佐は何のつもりで、こんなことを言いだしたのか。不審に思つて黙りこんでいたら、小園大佐は破顔していった。

秋津大佐は私の命の恩人ですから、もしも大佐がいなかったら、今ごろ私は海軍刑務所に放りこまれていたはずだ。秋津大佐は私よりも何十倍もうまいやり方で、目的を達成することができた。

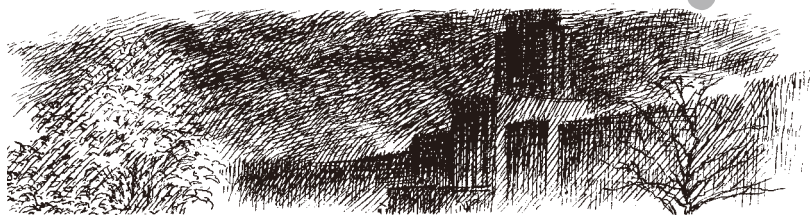
秋津大佐は首をかしげた。ますます理解できない。心当たりもなかった。

小園大佐の真意が気になるものの、一方ではこれ以上の好機はないと判断していた。この好機を逃すと、二度と機会はやってこないのではないか。





第一章 暗闘



1

秋津大佐にとっては、久しぶりの東京だった。とうに日は暮れて、路上に寒気の塊が滞留している。予定では明るいうちに参謀本部入りするはずだったが、厚木基地の混乱が予想外に長くつづいたらしく到着が大幅に遅れたのだ。そのせいで陸軍省のちかくまできた時には、寒気が一段と厳しさをましていた。

今回の視察で訪れたのは、大部分が中部太平洋に点在する島嶼群^{とうしょぐん}だった。広大な太平洋戦域の中では、地理的特徴や気候風土が日本本土に近い方だった。その事実が、逆に負担を大きくした。自分自身の体力を、過信していたのかもしれない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。